

■ 新潟市学校給食懇話会（第6回）

日時：令和5年10月4日（水）午後3時半～

会場：新潟大学駅南キャンパス

「ときめいと」講義室A

（村山座長）

皆様、こんにちは。この新潟市学校給食懇話会は、多様なメンバーの皆様からご参画いただき、過去5回、さらに現場への視察を2回行い、深く議論してきました。いよいよ今回が第6回目で懇話会の総まとめということで、提言案を議論することになっておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

本日の議題に入りたいと思います。本日は16時45分終了ということですので、円滑な議事進行にご協力をお願いいたします。

それでは、議事の1、学校給食懇話会提言案について。これまで委員の皆様からいただいた意見を基に提言案を作成しておりますので、事務局からご説明をお願いいたします。

（事務局）

保健給食課の堂前よりご説明させていただきます。

まず、委員の皆様には、事前に提言案のたたき台に対してご意見をいただきありがとうございました。いただいたご意見はほぼ反映しておりますが、文言調整の結果、一部反映できていない箇所がありますのでご了承ください。また、本日、この提言案をご確認いただいて、完成した提言については、後日、座長の村山先生と座長代理の大坪先生から、新潟市教育長へ手渡していただくことを予定しております。

資料はホチキス止めのものになります。こちらをご覧ください。

まず、表紙になります。左側に行数が入っていますが、これは便宜的につけているだけで、最終版では削除しますのでよろしくお願いいたします。

「今後の学校給食のあり方について」ということで、日付は手交の日にさせていただきます。

1枚おめくりください。提言の中身に入っていきます。まず、35行目から40行目のところですが、全体の導入部分になります。この懇話会では、三つの論点、かぎ括弧で書いた、「適切な栄養摂取による健康の保持増進」、「学校給食を活用した小学校から

中学校まで切れ目のない食育」、「地産地消を含む魅力ある給食提供」の三つの論点、また、それを実現するために今後の学校給食のあり方はどのようなものがよいかということをご議論いただき、今回を含めて計6回の懇話会と2回の学校視察を行って議論を深めていただきました。その結果を踏まえて提言案をまとめさせていただいております。

42行目、提言の全体像になります。前回の懇話会でお示しした全体像に追加させていただいています。中段の、学校給食を通して目指す子どもの姿というブロックパーツに生かされています。まず、全体像の一番上の上段三つ、こちらは先ほどの三つの論点を書かせていただいています。次に、中段の目指す子どもの姿ですが、まず、真ん中に、心身の健康と健全な成長ということで、学校給食の一番の目的を書いております。また、その周りに、考える力・生きる力、新潟の愛着や誇り、他者への思いやりや感謝の気持ちを配置して、この四つを目指す子どもの姿としております。

また、その下ですが、前回の全体像では目指すべき方向性としていましたが、少し変え、目指す学校給食の姿としております。こちらについては、ここに記載の3点になります。

次のページをご覧ください。具体的な中身ですが、2、学校給食を通して目指す子どもの姿です。子どもの姿については、基本的には、文部科学省が出している食に関する指導の手引の六つの食育の視点が基本にはなりますが、その中でも、新潟市では特に、下書いてあります(1)から(4)を目指すということとしています。

まず、(1)の心身の健康と健全な成長ですが、給食で体と心の栄養を摂取することを基本とし、また、食への意欲・関心なども身につけていく、健やかに成長するという一方で、さらに、生涯にわたって健康で過ごせるようにするという記載としました。

(2)考える力・生きる力ということで、視察の中でご覧いただいたように、配膳作業の中で考える力が身につけていくということ。それから、さまざまな食に関する体験・学びを通して生きる力を身につけるということで、ジュースを注げない子どももいるというお話もありましたので、生きる力を身につけるといようにさせていただいております。

(3)他者への思いやりや感謝の気持ちを持つということで、配膳や片づけ作業の中で、子どもたちがコミュニケーションを取りながら、協調性とか周囲への思いやりを身につけていくと。また、食に関わる全ての方々や食べ物への感謝の気持ちを持つというようにさせていただいております。

(4)新潟への愛着や誇りを持つということで、新潟は豊かな農林水産物があります

ので、それらの特性ですとか食習慣など、地理・歴史・文化的な背景を含めて学び、新潟、また地域に愛着と誇りを持ってもらいたいというように子どもの姿を書かせていただいています。

また、このような子どもの姿を実現するために、3の目指す学校給食の姿を書かせていただいています。目指す学校給食の姿として、子どもが主体的に関わる給食を基本とすると。また、具体的な取組みとして、給食提供方式は食缶方式による全員給食、併せて十分な給食時間の確保を進めて、目指す子どもの姿を実現されたいとまとめております。

また、(1)基本的な方向性ということで、学校給食を通して子どもの将来を見据えて、子どもが主体的に給食に関わる機会を創出し、さまざまなことを身につけられるようにするべきというようにしています。具体的な取組みとしては、自ら残食の片づけをするですとか、生産、献立作成、調理を体験する、また、次のページになりますが、農産物の栽培、収穫等を通じて感謝の気持ちをもつですとか、新潟だけでなく、ほかの地域の食文化等を学ぶ。また、子ども自らが学校のホームページ等で発信をしていくと。また、その取組みの中で、市内だけでなく市外ともつながりながら、給食を通じて学びあうというものがよいというように書かせていただいています。また、子どもからも意見、考えを聞いて、それを取組みに反映していくことも重要であるというようにまとめさせていただいています。このように、子どもが主体、子ども中心の給食とすべきというようにまとめさせていただいています。

(2)具体的な取組、ア、食缶方式による全員給食です。ここは、事前にご確認いただいたものから少し構成が変わっていますのでご了承ください。まず、一部の提供方式、特にスクールランチですが、選択制ということで、弁当持参や予約を忘れるケースがあるということ。また、量が調整できないために残食量が多いという特徴がありますので、この辺りで栄養摂取が十分かどうかの懸念があるというご指摘をいただいております。それらについて、新潟市の学校給食は、選択制を改めて、すべての小中学校で食缶方式による全員給食とすべきであるとさせていただいています。

その理由としては、下に・で四つ書いてありますが、必要な栄養のある食事を全員に提供できることということで、お弁当持参の子どもについても栄養が十分かどうかは疑問があるというご意見をいただいております。全員が栄養のある食事をできること、それから、同じ献立を食べることで、例えば、今日のトマトは北区産ですよというような、給食を教材とした食育を進めやすくなること。また、食缶となることで、適温での提供により、よりおいしい給食となるということで、五感で味わい食べることを楽しめる給

食、また、結果的に残食の改善につながる。さらには、配膳等の作業を通じて考える力・生きる力を身につけるなどの効果が期待できるということから、食缶方式による全員給食とすべきとさせていただいています。

122 行目、「また」のところですが、給食の実施にあたっては、食育の充実は当然ですが、全員給食になると多くの給食管理が必要になってきます。給食管理、食物アレルギーへの対応、栄養管理、肥満・痩身や偏食などの個別指導のために、現在配置されていないスクールランチ校を含めて栄養教諭の十分な数の人員配置が不可欠であるとさせていただいています。また、栄養摂取基準を満たすのはもちろんのこと、地産地消にも配慮し、高品質な食材の使用とか衛生的な調理などの創意工夫・努力を、今も栄養教諭の先生方には行っていただいています、それを引き続き行って、安心・安全でおいしい給食を維持・向上していくことが重要というようにまとめさせていただいています。

129 行目です。イ、十分な給食時間の確保ということで、前回、ご議論いただきましたが、給食時間の重要性というものが認識されているものの、食事を、単に口に入れて飲み込むだけという単なる燃料補給の時間となっているという懸念があるとご指摘をいただいています。給食時間を、楽しい食事の時間と表現させていただきましたが、その楽しい食事の時間とすることで、栄養摂取以外にも、食べることを楽しんで、食習慣、社交性、協同の精神などを養うと。それで、豊かな学校生活を送ることができるようにというようにしております。そのため、新潟市の学校給食では、配膳や準備、喫食の時間を十分に確保すべきというようにさせていただいています。

次のページですが、時間の確保に加えて、給食時間の質を高めるということも重要ということで、下の黒・で挙げさせていただいています、食育の機会を作ること、それから、時間がなくて食べたいのに残してしまうというアンケートの結果もありましたが、そういうものを防いでいく。また、しっかり噛んでおいしいということを楽しんでもらうと。また、コミュニケーションを取りながら配膳・準備・片付けなどをする。何より友人と会話をして、食事の時間を楽しんでもらいたいということで、まとめております。

148 行目、(3) ですが、懇話会でもさまざまなご意見をいただいていますので、それをまとめさせていただいています。ア、地域や家庭を含めた幅広い食育ということで、小中の連携の視点で、食育フォーラムですとか情報交換の場を定期的に設けて連携強化をしていく。それから、家庭での食育も重要ですので、保護者への食育。また、給食の写真、ホームページに載っているものが保護者と子どものコミュニケーションのきっかけとなるということですので、そういう情報発信を積極的に行っていく。家庭や地域も大事ですが、もちろん、学校の中での食育も重要ですので、様々な教科や活動の中で食

育を取り入れていく。さらには、給食指導、食育に関する教職員向けの研修等を実施して、より適切な指導を行えるようにしていくとまとめております。

161 行目、学校給食における地産地消の推進ということで、積極的な給食への活用もありますし、生産者と学校現場で意識、考え方のギャップがあるということで、ここをつないで互いを理解する機会にする。それから、米どころ新潟の特徴を生かして、完全米飯給食、今も行っていますが、これを継続していくとか、その特色、食文化を知って興味を持たせるということで、まとめさせていただいています。

本文についてはここまでですが、最後のページに委員の皆様、オブザーバーの皆様の名簿と、これまでの懇話会の開催の経過を書かせていただいています。

(村山座長)

ありがとうございました。

ただいま、事務局より提言案についての説明がありました。改めてご覧になっていただき、何か追加したほうが良いこと、あるいは確認することなどがありましたらお願いいたします。なお、追加や修正につきましては、可能な限りこの場で対応していくということになりますけれども、対応が難しいものについては、座長にご一任いただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、皆様から追加、修正のご意見があればお願いいたします。

(山崎委員)

1 ページ目の図の部分なのですが、真ん中の三角のところ、「新潟に愛着や誇りをもつ」というのがありますが、子どもにとって新潟に愛着や誇りを持つことがどういう意味があるのか、いまいち腑に落ちていないというか、その目的などがあった方が良くと思いました。大人としては将来新潟に残ってくれる子どもが増えたらいいというのはもちろんあるのですが、子どもにとって新潟に愛着や誇りを持つことの目的が、自分としては少し説明が難しいと思ひまして、市の皆さんはどのようにお考えでしょうか。

(事務局)

今、新潟市は選ばれる都市、活力のある都市を目指す、持続可能な都市として発展していくという目的のもと、「にいがた2 km」などさまざまな取組みを行っています。それらの目的の基礎としても、やはり、新潟、地元へ愛着や誇りを持っていただくというようなことは必要ではないかと思っており、子どもたちにもそういう意識を感じても

らうような取組のひとつに給食もなると良いと考えています。

(山崎委員)

そうですね。提言の中にも出てきていますが、もちろん、地産地消は、自分たちに近いところで作られているものということで、より新鮮な野菜を食べることができ、さらに生産者の顔が見える、身近さを感じるということが大きなメリットです。ただ、冬の時期に新潟はほとんど野菜が採れないですよ。その時期に、例えば、九州から野菜が来ていることを知ることも食育になると思っています。何も新潟ということにだけこだわる必要はないのかなというのが私の意見で、もし「新潟」というものが必要なのであれば、子どもたちにとって良いと思えるような目的がある方が良いのではないかと思います。

(村井委員)

これは多分、私が以前に意見したことが反映されているのかと思います。「新潟に愛着や誇りをもつ」という言葉の使い方が、愛国心であるとか、やや排他的な意味合いに捉えられはしないかという印象もあったのです。

ただ、やはり、子どもたちに地域の農産物とかそういったものを知ってほしい、それを誇りに感じてほしいという思いはあります。野菜で言えば、例えば、京野菜とか、特定の地域でしか採れないような野菜、伝統的な食文化というものをきちんと子どもに伝えていく場というのは給食の中にあるべきではないかと思いますので、この記載は採用して良いのかなと思いました。

子どもたちにとって、という部分では、例えば、新潟にはこういうナスの文化がありますよ、あるいは、女池菜という葉物がありますよ、一方でほかの地域にもこういうものがあるんですよということを正しく伝えることは大切だと思います。山崎委員がおっしゃったように、例えば、新潟で農産物が採れない時期に他県のもの、さらには、いろいろな国の食文化などを紹介する。そういったことで、違いを子どもたちが理解し、その違いに対して自分たちが住んでいる新潟というものの良さであるとか、あるいは改善すべきではないかという部分も併せて、子どもたち自身が考える機会を設けながら、しっかり伝えていくことが必要だと思います。

それを、例えば、食育フォーラムというところに収れんしても良いのではないかと思います。以前、食育フォーラムをやったときの話ですが、日本で初めて計量スプーンを作ったのが三条の工場だったわけです。それを新潟の子どもたちが知ることによって、

食文化に対して新潟がこういう貢献をしたのだということを、とてもプラスに受け取っている姿を見たときに、やはり、きちんと伝えていくということは大事だと感じました。

(村山座長)

佐久間委員、何かご意見はありませんか。

(佐久間委員)

私はこれで良いと思います。まずは自分の地域を知って好きになることは、子どもにとって必要だと思います。

(村山座長)

私も新潟市に生まれて、県外、国外と行って戻ってきた者ですが、やはり、食だけではないですが、自分の地域のことを他者に紹介できるということは、自分が何者かを認識することにつながっていくので、子どもにとっても意味があると感じています。

(大坪委員)

私も村井委員や村山座長のおっしゃるように、子どもたちが給食を通じてふるさとの現状、農産物、食文化などに触れて学んでいくというのはとても良いことではないかと思います。ただ、「新潟とそれ以外」という形にならないようにというご懸念はごもつともだと思います。ですから、もし修正が可能ならば「生まれ育った地域に愛情、誇りを持って生きていく」とか、少し言葉を添えることで子ども目線になるのではないかという気がしますが、細かい文言の提案で、意見は村井委員の意見に賛成です。

(村山座長)

事務局からお願いします。

(事務局)

「新潟に」というところがクローズアップしすぎるというのであれば、ここを「地域に」というようにすれば、新潟とそれ以外という構図ではなくて、生まれ育った地域一般ということで少し弱められるのかなと感じますがいかがでしょうか。

(村山座長)

確かに、排他的な印象が弱くなる感じはしますね。

それでは、「地域に愛着や誇りを持つ」の形で、最後の1行を修正ということでもよろしいでしょうか。

ありがとうございます。

それでは、別な点ということで、佐久間委員、お願いします。

(佐久間委員)

書き方の問題で、3ページ目の130行、単なる「燃料補給」の時間ということで、燃料補給だけかぎ括弧になっているのですけれども、次が楽しい食事の時間で閉じているので、燃料補給の時間まで括弧をつけたほうが、正確に比較になって良いと思います。

(村山座長)

それでは、括弧位置の修正ということで、お願いします。

(赤松委員)

4ページ目の(3)その他重要な項目についてですが、その五つの○最後の二つが学校の中の話になっています。私は、学校給食については、まずは地域・家庭より前に、学校の中で教職員が皆で取り組もうという気持ちを高めることが非常に大切だと思います。しかし、アの標題が「地域や家庭を含めた幅広い食育」となっているために、学校全体として食育に取り組む必要性を少し弱めてしまっているように感じます。よって、アの標題中に「学校」と入れるか、あるいは、学校と地域・家庭を別立てにするか、などの検討が必要と思います。

平成29年に文部科学省が出した「栄養教諭を中核としたこれからの学校の食育」という冊子があります。この中では、PDCAサイクルを回すということに加えて、チームとして学校全体で食育に取り組むことの必要性が強調されています。いまだに学校の先生方の中には、食育は家庭でやることだと考える方もいらっしゃると思いますが、学校給食においては、給食時間に先生がどのように指導してくださるかによって残食状況はかなり変わってくると思いますので、まず、先生方の意識改革というものが非常に大切だと思います。この二つの項目を別立てにするほうが良いかは検討いただきたいですが、いずれにしても、家庭・地域の中に学校での取組が紛れてしまっている点をご検討いただきたいと思います。

(村山座長)

事務局から、何か改善案はありますか。

(事務局)

例えば、アの標題に「学校」を挿入した形に修正してみます。

(パソコンで修正し、スクリーンに投影)

(村山座長)

別立ての案もありますが。

(事務局)

では、別立てで作ってみます。

(パソコンで修正し、スクリーンに投影)

(村山座長)

では、現場の先生方のご意見として、逸見先生、いかがでしょうか。

(逸見オブザーバー)

(3) のアを地域や家庭を含めた幅広い食育にして、イのところで学校給食における地産地消とあり、また学校が項立てされることについて、イについては、地産地消の推進、学校が三つのうち二つ項目が上がることになりますよね。

また、学校での取組を別立てにすると、156 行目の「学校給食だけでなく」という言葉が取えていないというのでしょうか、重複するように思います。

(村山座長)

別立てにすれば、その文言は要らなくなりますね。

ありがとうございます。

本多先生、いかがでしょうか。

(本多オブザーバー)

私は、項を分けるか否かは、どちらでもいいかなと思っています。

少なくとも私が校長として赴任した3つの学校の印象としては、食育は十分に浸透し

ているように感じます。小学校の場合は新潟市全域を見るのではなく、その地域に合わせた食材や果物などに焦点を当てた食育を展開していますし、現任校の山の下小学校では、学校の校地内にあるものを使って児童がジャムを作ったり、地域のお店の方と連携してデザートを考えたりとさまざまな教科の中で行っています。このように、新潟市のほとんどの学校では、かなり食育を重視して展開していると思います。

しかし、やはり、採用されたばかりの職員や、その他さまざまな考えを持っている職員もいるというのが現実ではあるので、提言の中にしっかり入れるのは非常に大事だと思います。実際に取り組む際には、それぞれの学校の現状や課題に合わせていいことなので、懇話会の提言として入っていることについて、必要ではないかという意見です。

(村山座長)

ありがとうございます。

栄養教諭の先生方は何かありませんか。

(渡邊オブザーバー)

子どもたちへの食育の部分では、学校給食というのを分けて考えていただけると良いのかなと思います。

(事務局)

今、直して提示しておりますが、学校における食育ということで、最初に「様々な教科や活動の中で食育を取り入れていくことが重要」、次に「食に関する指導を適切に行えるよう、給食指導や食育に関する教職員向けの研修等を実施」。その次に「合同でのフォーラム」ということで、入れさせていただきます。

(パソコンで修正し、スクリーンに投影)

(村山座長)

そうですね。イが地域や家庭での食育ですか。

(逸見オブザーバー)

「小中合同の食育フォーラムや学校間の情報交換の場」ということも、当然、地域の方、保護者の方をお呼びしますが、その前の段階として、学校での研修を進めてこのフォーラムを実施しています。そうしたときに、どこからどこを地域、家庭、学校という

ように線を引くのが難しいのではないかと思います。

(山崎委員)

この項目だけを見ていると、その前段、(2)までのものは給食について話していて、その他重要な項目でいうと、給食という枠を越えて食育にかかわっていくということで、アで言いたいのは、学校、地域、家庭が連携して食育に取り組んでいきたいと思いますという内容だと思います。ただ、先ほど赤松委員がおっしゃっていたように、まず学校の姿勢を示すのは大事だと思いますので、どういう書き方が良いのかは具体的に言えないのですが、項目が「連携」という内容になっているので、確かに分けるのは難しそうだと思います。

(村山座長)

大事なところなので、もう一回整理して作っていただけますか。

(事務局)

今、連携した食育という言葉をいただいたので、「学校と家庭、地域が連携した食育」ということで入れさせていただきました。それで、連携ということで、どこかで学校がチームで取り組んでいくことを入れたいなと思います。

(赤松委員)

チーム学校ですね。

(事務局)

「食に関する指導を適切に行えるよう、給食指導や食育に関する教職員向けの研修」。次に、「小学校・中学校の連携強化」、「家庭でも食育」、そして「情報を学校のホームページ等で積極的に発信」というように入れております。

(パソコンで修正し、スクリーンに投影)

(村山座長)

委員の皆様、いかがでしょうか。

(逸見オブザーバー)

すみません、まだよろしいでしょうか。二つ目の丸に「教職員が食に関する指導を適切に行えるよう」、また、後半が「給食指導や食育に関する教職員向けの研修等を実施する」というところが、「行えるよう」、「実施する」と内容を繰り返しているような印象があります。

(村山座長)

繰り返してはいなくて、教職員が食に対する指導を実施できるように、学校が教職員への研修をするということですね。

(事務局)

では、「食に関する指導を教職員が適切に行えるよう」と入れると、意味は大丈夫でしょうか。

(村山座長)

主語が分かりにくかったのですね。

(事務局)

そうかもしれません。

(逸見オブザーバー)

そうすると、「教職員向け」は不要になるのではないのでしょうか。

(村山座長)

それは重なっているかもしれないので消してください。

(事務局)

はい。ありがとうございます。

(パソコンで修正し、スクリーンに投影)

(本多オブザーバー)

2番目の、食育に関する研修等を実施するとなっているのですけれども、私がこれを見たときに、これは学校が自校の職員に対してやるものではなく、教育委員会が実施す

る研修会というように捉えました。誰がやるのかという捉え方がまちまちになるかもしれません。

(村山座長)

それは、恐らくさまざまなパターンがあると思われるので、誰がというところまでは書かなくてもいいかもしれません。学校がやるケースも、教育委員会がやるケースも、もっと違うところがやることもあるかもしれません。

(本多オブザーバー)

そうですね。外部団体などのいろいろな研修会があり、食育担当はそういう研修会に出かけていくこともありますので。

(村山座長)

「実施する」という表現だから誰が実施するかが気になるのでしょうか。
その文言については、事務局で提案はありますか。

(事務局)

例えば、上と同じように「重要」という表記ではどうでしょうか。

(村山座長)

そうすると、誰がやるのかは問わないが、重要性を訴えることはできますね。研修の機会が重要、必要であるということですね。

本多オブザーバー、そういう文言でいかがでしょうか。
ありがとうございます。

(事務局)

そうですね、少し前とのつながりが悪そうなので、「適切に行えるよう」の表記は大丈夫でしょうか。

(佐久間委員)

「理解を深める」とかはどうでしょうか。機会を増やしても理解していなかったらだめで、食育指導を行えるようになるには、研修だけではないと思うのです。だから「食

に関する指導を教職員が適切に行えるよう、学校給食や食育に関する理解を深める」ではどうでしょうか。

(村山座長)

佐久間委員がおっしゃっているのは、研修などの手段は問わないということですね。

(佐久間委員)

手段はさまざまだと思います。「教職員が」という主語を「理解」の表記に近いところのほうが良いと思います。

(村山座長)

少し読んでいただけますか。

(事務局)

はい。「食に関する指導を教職員が適切に行えるよう、給食指導や食育に関する教職員の理解を深めることが重要となる」。

研修自体は今もやっているということと、研修以外の機会でも理解を深めるというのが重要というご意見をいただいていますので、そのように書いてみました。

(逸見オブザーバー)

細かくてすみませんが、「教職員は給食指導や食育に関する理解を」のほうが良いと思います。

(事務局)

はい。「食に関する指導を適切に行えるよう、教職員は給食指導や食育への理解を深めることが重要となる」。

(パソコンで修正し、スクリーンに投影)

(村山座長)

それで逸見オブザーバーもよろしいでしょうか。

ありがとうございます。

それでは、ほかの論点で、いかがでしょうか。

(佐久間委員)

テーマが学校給食のあり方ということで、今までの審議の中でもずっと学校給食について議論してきて、その他重要な項目では、学校現場だけではなくて、やはり、家庭の理解とか教育が必要だということ、家庭とか地域を巻き込んだ食育が大事だという話になってきたと思います。だから、学校ではこんなに頑張るけれども、家庭でも食育を理解してもらわないといけないので、私は逆に、「家庭でも食育を理解して」の文章が頭にきたほうがいいのではないかと思います。学校だけが頑張っていて、では食育は学校に任せましたとなっても、その人の食に対する考えは変わらないと思います。給食で食べたくないものは残すというようになってしまうので、やはり、家庭での保護者の立ち位置も大事だということはあった方が良くはないでしょうか。

(村山座長)

そうすると、提案としては、順番を変えるということですね。

しかし、これは学校給食だから、学校から展開するほうが整理としては良いのではないかと考えていますが、佐久間委員いかがでしょうか。もちろん、家庭での食育が大事ではないと言っているわけではないのです。

(佐久間委員)

はい、学校給食懇話会ですものね。

(赤松委員)

言葉の確認をお願いしたいのですが、124行目の「栄養摂取基準」は、学校給食においては「学校給食摂取基準」ではないでしょうか。確認をお願いします。

(村山座長)

再度確認して修正させていただきます。文部科学省が示しているものですよ。

(赤松委員)

はい。

(村山座長)

はい。そちらに合わせます。

(赤松委員)

とても些細な箇所ですが、文末は「必要」という体言止めや、「である」という表現が混在しているので合わせたほうが良いと思います。

(事務局)

承知しました。

(佐藤委員)

家庭での食育ということですが、ほかの項目は具体的なアクションプランが想像できるのですが、ここだけ具体的な取組が見えないような気がします。学校で保護者向けの食育の何かをやっていたりしますか。先ほど佐久間委員が言ったように、確かにこれはとても大事だと思いますが、保護者に食育が重要と言っているが、では何をすれば良いのかが示せていないように感じます。

(村山座長)

具体的な働きかけや取組の例示のようなものを入れたほうが良いのではないかとということですね。

(佐藤委員)

P T Aで食育に関する研修をやったりする事例はあります。

(村山座長)

事務局、お願いします。

(事務局)

例えば、給食だより等で食育に関する記事を入れてご家庭にお送りしたり、P T Aなどで研修をされたりということもあると聞いています。

(富張オブザーバー)

試食会で食育のお話しをさせていただいた事例もあります。

(村山座長)

そういうものも入れたほうが良いですか。

(佐藤委員)

私のように普段、食育の取組などにあまりかかわったことがない人から見ると、何か投げやりな言い方に感じてしまったという感想です。

(村山座長)

そうすると、「給食や試食会、P T Aでの研修など」と追加を検討しましょうか。

(村井委員)

佐藤委員がおっしゃったように、ここは何かぼやっとしているとは思いました。ただ、前半の「家庭でも食育を理解して子どもと接することが必要」という記載は、子ども目線では逆で、「子どもと接するうえで家庭での食育の理解が重要」ということですね。そうすると、保護者への食育への理解を進めるという意味なのではないかなと思います。

(村山座長)

具体的に働きかけを入れるというよりは、保護者への理解を促す意味合いですね。

(村井委員)

「子どもと接するうえで家庭での食育の理解が重要」ということは、保護者への食育の理解を進める、または、理解してもらう機会を設けるという意味になるのではないのでしょうか。そうすると、保護者の方に例えばこういうことに取り組みましようみたいなものが出てくると思います。

(山崎委員)

先ほど2番目が出てきた、「理解を深める機会を創出する」とか「重要である」というまとめ方だと、給食だよりや試食会、P T Aの研修会というものがその中に内包されるのではないのでしょうか。

(佐久間委員)

「子どもと接するうえで家庭での食育への関心が重要である。そのために、保護者の食育への理解を深めることが重要となる」。というのはどうでしょうか。まずは「関心」が重要で、そこから食育の理解を深めてもらえるようにしようということです。

(村山座長)

それも2番目の丸と同じようになりますか。

(事務局)

そうですね。二つ目の丸は「指導を適切に行えるよう、理解を深めることが重要」と。

(佐久間委員)

学校では児童へ指導しないといけないから、それには理解していないとできないですよ。

(赤松委員)

家庭の中では難しいことではなく、まず関心を持ってもらうということですね。すみません、表現について、発言しても良いですか。

(村山座長)

はい、お願いします。

(赤松委員)

「接する」という表現が少し引っかかっています。給食は昼だけで朝夕2食は家庭、夏休みなどの休暇も家で食べますし、子どもの健やかな成長には家庭での食事が非常に大切です。家庭は子どもと「接する」よりも「育てる」場です。ですので、保護者には食に対する関心を持ってもらうことが大切だという表現になった方が良いと思いました。

(村山座長)

「子どもと接するうえで」をカットすれば良いですか。

(佐久間委員)

あとは、家庭での食への関心です。

(村山座長)

「重要である」という表記が二つ出てくるのが若干気になると思います。

(赤松委員)

別の言い方だと、「必須」、「欠かせない」などでしょうか。

(佐久間委員)

保護者の責任が伝わる印象です。

(佐藤委員)

142行目の「新潟への愛着や誇りを持つ」の箇所は「地域」になりますか。

(事務局)

今、直しました。

(パソコンで修正し、スクリーンに投影)

(佐藤委員)

それと、146行目、「友人との会話」というのはまだ再開されていないでしょうか。

(事務局)

いえ、もう黙食ではないです。

(佐藤委員)

そうなのですね、それでは大丈夫です。

(村山座長)

ほかにいかがでしょうか。

よろしいでしょうか。かなりいろいろご意見をいただきまして、ありがとうございます。それでは、提言についての議論はここで終了にしたいと思います。

あとは、せっかくの機会ですので、皆様から、この懇話会に参加された感想や、給食などに対する思いなど、最後にお伺いできればと思います。では、佐藤委員から順にお

願います。

(佐藤委員)

貴重な機会に立ち合わせていただき、本当に実りのある議論ができたと思います。

一つだけ最後にお聞きしたいのですが、108行目と129行目の(2)具体的な取組み、ア、イがある中で、アはどちらかという中長期的な取組みかと思いますが、今後、いろいろと議論しながらやられるのだと思います。それで、イの十分な給食時間の確保というのは、短期的にできる話だと思います。やはり、校時表を決めるのは学校現場なので、この提言を出したところで受け入れられるのかという議論も以前あったと思いますが、その辺りをルールに乗せるために、教育委員会として何か考えられていることはありますでしょうか。この提言書を出したあとのアクションとして具体的に考えている仕組みなどはありますか。

(村山座長)

事務局から、答えられる範囲で願います。

(事務局)

ありがとうございます。喫食時間、給食時間を十分に確保することは従来から学校にお願いしておりますが、皆様から改めてこういった提言をいただいたということで、私どもも重く受け止めさせていただきます。教育委員会としては、それを学校現場にしつかりと伝え、アクションに移してほしいと働きかけていきたいと思っています。

(佐藤委員)

タブレットや部活動の地域移行もそうですし、新しいことを始めるときには、大体、モデル校を指定して始めるケースが多いと思います。これもモデル校から始めて、アンケートを回収して、給食時間が前より楽しくなったみたいな評価をもとに横展開していくというようなやり方などはやりやすいのかなと思いましたので、その辺りも考えていただければと思います。

貴重な機会、ありがとうございました。

(村山座長)

ありがとうございました。

村井委員、お願いします。

(村井委員)

6回にわたり、素晴らしい方々と一緒にこうやって給食のことを考える機会をいただいたことを、まず、お礼申し上げます。自分にとって非常に刺激的な会でしたし、今まで給食というものに対して、食育の立場からまだまだ見ていなかったなという、自分自身の気づきがとてもありました。

それで、あるとき聞いた言葉ですが、「子どもたちのために」というのは魔法の言葉だということにおっしゃっている方がいて、子どもたちのためには、いろいろな立場の違いを越えて、ある理想に向かって議論を進められるというものです。私もそう感じていきますので、この機会がまたさらに新しい機会につながっていけば良いと思いますし、また何かの機会にはぜひよろしくをお願いします。

(村山座長)

ありがとうございます。

山崎委員、お願いします。

(山崎委員)

このような貴重な会に参加させていただきまして、ありがとうございました。

私自身は農業法人で、普段は小中の学校給食には特に携わっていないのですが、改めて、食べるということについて、いろいろな立場の皆さんとディスカッションでき、その中での学校給食を栄養であったり楽しい時間であったりという観点で考えることができたことは、すごく良い経験になりました。学校給食の現場も見ることができて、今、こうなっているんだとか、こういう課題があるんだなというところに気づくことができたので、本当に良い機会をいただきまして、ありがとうございました。

(村山座長)

ありがとうございました。

せっかくの機会なので、オブザーバーの先生方も、一言でけっこうですので、感想などをお願いいたします。

(渡邊オブザーバー)

このような貴重な会に出席させていただきありがとうございました。子どもたちのことについて、皆様が熱く議論されているのをお聞きすることができて、たくさん学ぶことができました。私も現場で、学校給食を通して一生懸命子どもたちのために頑張りたいと思います。ありがとうございました。

(村山座長)

富張オブザーバー、お願いします。

(富張オブザーバー)

普段は、給食を安全に出すことや、食物アレルギーの対応を間違いなくやることなど、そのような、目の前にあることだけに追われているような感じだったのですが、この会に参加させていただき、学校給食や、大きな食育という観点の話を通して、私たち栄養教諭もその役割を改めて考える機会になったと思います。ありがとうございました。

(村山座長)

ありがとうございました。

それでは、佐久間委員、お願いします。

(佐久間委員)

とても楽しく参加させていただきました。改めて、日ごろ思っていたことなどを議論できて良かったと思います。食は栄養だけではなくて、やはり、楽しさとか、生きる力とか、人間力も学べるものだとは私は思っていますし、これからもそういう生きる力、人間力などを高められるような給食であってほしいと思いました。

委員やオブザーバーの先生の意見を聞き、視察もして、学校現場が、こんなにも子どもたちのことを考えて食事の提供をしてくださっていることに改めて気づきましたし、私も一保護者としてきちんとしていかないとだめだなと、背筋がぴんと伸びた思いです。

あと、私は妊娠中からのお母さんにかかわっているのですが、離乳食よりももっと前の妊娠中の食生活からきちんと見直していくことを伝えなくてはと、少し自分の仕事の意欲も上がる、とても良い機会になりました。どうもありがとうございました。

(村山座長)

ありがとうございました。

坂井委員、お願いします。

(坂井委員)

食に携わるスペシャリストの方々の中に、市民公募で参加させていただいて、とても勉強になる機会をいただきました。

保育士としても興味深い内容でしたし、こういうものに市民の意見というのはあまり反映されないのかなと思っていましたが、自分の意見もたくさん反映していただきました。自分自身が中学時代にスクールランチを食べているときは、こんなにも大勢の方々がかかわって学校給食が成り立っていることは知らなかったもので、そういう部分も、自分自身の子どもや、仕事でも子どもたちに伝えていけたら良いと思っています。ファストフードとか代替食品とか、いろいろなおいしい食品がありますけれども、やはり新潟市の女池菜など、新潟でしか食べられない、いろいろな魅力ある食材を、自分自身も子どもと一緒にたくさん食べて、食を営む力をつけていけたらと思っています。貴重な機会、ありがとうございました。

(村山座長)

ありがとうございました。

大坪委員、お願いいたします。

(大坪委員)

私は給食については専門ではないので、お役に立てるのか心配しながら加えていただいたのです。給食の自分の思い出といえば、もうコッペパンと脱脂粉乳の時代だったのですが、自分の孫ぐらいに当たる生徒の現場を見せていただき、本当に学校給食は良いものになったと感じました。そうした中で、さらにそれを高め、より良いものにしていくというご努力に対して、深い敬意を表したいと思います。

そして、いろいろな立場の委員の皆様のご意見を伺いながら、自分自身も非常に勉強になりました。ありがとうございました。

今日、この懇話会としての結論が、全員給食によって同じ給食を食べることを基盤に、楽しく食べ学ぶということ、喫食時間を確保することで給食の意義を高める、そして、幅広く食育や地産地消の視点も取り入れた素晴らしいものになったと感じております。

最後に、私は専門として米の研究をやっていますが、新潟は素晴らしい地域なので、米に限らず、農水産物すべてで地産地消を重視した給食を進めることが、子どもたちが

生まれ育った地域を大切にすることにつながっていくのだらうと思います。今後の給食に対してとても期待を持っていますし、自分の授業などにも生かしていきたい、また、これからもまた勉強していかないといけないということを痛切に感じました。ありがとうございました。

(村山座長)

ありがとうございました。

赤松委員、お願いします。

(赤松委員)

私は、6回の懇話会のうち、半分くらいは新潟に来させていただきました。学校の視察や試食も経験させていただき、本当に勉強になりました。

この提言は素晴らしいものができたと思いますが、出した後からがスタートです。目指す学校給食の姿を実現するために大変なこともあると思いますが、新潟市の学校給食がより良くなることを期待しております。ぜひ、経過を聞かせていただけたらと思います。ありがとうございました。

(村山座長)

ありがとうございます。

それでは、オブザーバーの逸見先生、お願いいたします。

(逸見オブザーバー)

貴重な会に参加させていただき、ありがとうございました。学校現場で見ていると、給食が唯一、地域の食材や料理などの文化を継承していくものになりつつあるなと思います。その中で、子どもたちがその味に親しみ、おいしいと思ってつなげていく、給食はそういう貴重な機会だなということを再確認することができました。食事の時間、給食の時間を大事な時間をとらえて、さらに指導していきたいと思います。ありがとうございました。

(村山座長)

ありがとうございました。

本多オブザーバー、お願いいたします。

(本多オブザーバー)

貴重な会に参加させていただいて、本当にありがとうございました。この提言が5年後、10年後の新潟市の学校給食を変えていく、充実させていく礎になると思っています。ここで皆さんが交わされた熱い気持ちを受け止めながら、自分自身、学校給食のあり方も見つめ直し取り組みたいと思っています。大変ありがとうございました。

(村山座長)

ありがとうございました。

皆様、活発にいろいろなご意見をいただきまして、感謝申し上げます。そのおかげで、包括的にいろいろなことが盛り込まれた、とても豊かな良い提言ができたと考えています。特に、子どもの目指す姿から出発して、子ども中心として学校給食がどうあるべきかを議論できたことは良かったと思っています。SDGsにもある、「誰一人取り残さない」という観点も踏まえて、新潟市の学校給食がどうあるべきかを提言できたのではないかと考えています。

ここのポイントにあります食缶方式全員給食はもとより、時間の確保など現場との調整が必要なものについても、これは本当に重要な点ですので、しっかり実施していただけるように、ぜひ、お願いしたいと思っています。

それでは、参加した委員、オブザーバーの感想ということで終わりにしたいと思います。

ほかに、何かある方はいらっしゃいますか。

(事務局)

保健給食課長の袖山です。私から一言、申し上げたいと思います。

皆様からは、この2月からということで、短い期間でしたけれども、ここまで意見をまとめていただきまして本当にありがとうございます。この懇話会を通して、委員の皆様、オブザーバーの皆様から、給食はもちろん、子どもたちへかける思い、地域への愛情なども含め、さまざまな提案をいただきました。本当に濃い、有意義な時間でした。

この春の新潟日報の窓欄に、南区の中学生が投書した記事があり、「給食は魔法にかかる時間だ」と、おいしさや、時間の楽しさが魔法がかかる時間というようなことでした。それを読んだときに、うれしさと同時に身の引き締まる思いがしたところです。委員の皆様の思いですとか、こうした子どもたちの思いをしっかりと受け止めて、今後、

保健給食課が中心となりまして、こちら、いただく提言の実現に向けて前進したいと考えています。子どもたちにとって安心・安全はもちろん、健やかな成長、健康のために魅力ある給食にしていきたいと考えております。これまで、本当にありがとうございました。

(村山座長)

ありがとうございました。

では、これで予定していた議事はすべて終了しましたので、進行を司会にお返しします。委員の皆様におかれましては、今年2月から、全6回に渡る議論、大変ありがとうございました。お疲れさまでした。

(司 会)

村山座長、ありがとうございました。それでは、閉会に際しまして、池田教育次長よりあいさつ申し上げます。

(池田教育次長)

教育次長の池田です。皆さん、本日は大変ありがとうございました。今ほど袖山課長から話がありましたが、6回にわたり、それぞれの専門の分野、そして専門を越えて、新潟市の子どもたち、給食のために真剣な議論を進めていただき、思いのこもった素晴らしい提言が本日、形になったと思います。

今日は恐らく、簡単な確認で終わるのかと思ったら、一字一句まで見て熱い議論を最後までやっていただき、本当にうれしく思い、また、しっかりとそれを受け止める必要があると思いました。給食を語りながら、子どもを語りながら、学校生活や学校教育からだんだんと話が広がって行って、それは子どもたちの生活、子どもたちの人生、生涯にわたって、その中で、今、学校給食を通して何ができるのだろうということを考えて議論してくださっているのが、私自身、懇話会の議論でとても心に残っています。

今、いろいろな教育の議論で、やはり、学校時代に起きていることがこの子の一生にとってどうなのだろうということが重視されています。今日、新聞にもありましたが、中学校時代にいじめに遭ったことがこの子の生涯にとってどうだろうとか、不登校、以前であれば教室に行くことがゴールだったのだけれども、教室に行かなくても、このことを通して生涯にわたってこの子がどうなれば良いのかを考えることが必要なのです。今、まさに教育というのは、学校の時期、学校という場だけでなく、空間においても時

間においてもすべて生涯を通して語られています。この給食の議論もそうだったと思っています。この提言を、先ほどスタートラインというお話がありましたけど、これからどう生かしていくのかというのが私たち行政にかかっていることであり、学校現場とともにしっかりとやっていきたいと思っています。

そして、もう一つ、過去にスクールランチ制度を作ったときには、この形が良いだろうという判断をしました。時代背景であったり変革の時期ということもあったと思います。その時には、その形がベストだと思って実施するわけですが、固執することなく、情報を集めながら、社会の変化や子どもたちの変化に対応しながらしっかりと継続的により良い制度、より良い給食を作っていきたいと思っています。

今後とも、より良い学校給食が提供できるように、そして、より良い新潟市を作っていきたいと思っています。今後ともよろしく願いいたします。ここまで、本当にどうもありがとうございました。

(司 会)

では、長時間にわたり、ありがとうございました。これで新潟市学校給食懇話会は終了になります。どうもありがとうございました。